

SIA (Soaked in Asia)韓国編、インド編に寄せて

高樹, のぶ子
九州大学アジア総合政策センター : 特任教授

<https://doi.org/10.15017/17942>

出版情報 : 九州大学アジア総合政策センター紀要. 5, pp.239-240, 2010-06-30. Kyushu University Asia Center
バージョン :
権利関係 :



SIA (Soaked in Asia) 韓国編、インド編に寄せて

高樹 のぶ子

(九州大学アジア総合政策センター・特任教授)

「恨」という劇薬＝韓国 SIA

お隣の韓国は、儒教を経て今があるという点でも、文化が半島経由で日本に入ってきたという意味でも、他のアジアの国々より近い。今回取り上げたパク・ワンソさんの「親切な福姫さん」も、一昔前の日本には沢山いたと思われるが、現代の強くなった女性からすると、福姫さんの忍従は共感を得るのが難しいかもしれない。

けれど、対照するものが無くては現代も見えて来ない。実際に「福姫さん」を探すうちに韓国ならではの家族観も見えてきた。若い女性は、福姫さんの母親像を、強く否定することで、新しい男女関係を作ろうとしている。若い女性たちの多くが、自分の母親のように生きたくないと言明した。はっきりとそう口にするところが、韓国人の気質なのかも知れないが、もうひとつ、そこに世代間の近さを感じてしまうのも確かだ。親と近く居るからこそ、強い否定感情も生まれてくる。親世代の「恨」を我が事として感じるだけの近さがあるということだ。

儒教的な男性優位意識は、今も強く根を張っていて、結婚した場合に妻が負うべき夫の身内との関係に至っては、日本とはかなりの落差がある。

若い男女の感覚は、日本と同じかむしろ女性の自己主張は強い気がするものの、裳裾はしっかり家族関係に纏まれている、結婚後も精神的な自立を保ち続ける自信がない。その結果、非婚宣言をする女性たちも出て来ている。

非婚という極端な行動は、「老人の性解放」という、これまた日本の意識を飛び越えた最先端の運動と、どこかで繋がっている気がする。全州市の福祉センターには、建物前面に「性には定年がない」という横断幕が掲げられ、老人

の性相談室では、70代80代の男性が性の悩みを訴えていた。老人女性の性の悩みも、訴えられるそうだ。

ひと言で言えば、いろんな面で「血が濃い」ということか。

そんな中、今回の韓国訪問で会った沢山の人の中で、もっとも日本人に近いと感じたのはパク・ワンソさんだった。芯が強いけれどそれを言葉では主張せず、少女のように可愛い振る舞いを終始守り続けて…一見すれば激しさより中間的な穏やかさを感じさせる人。けれど、おおよそ「恨」とは無縁に見える人が、恨を書く。この短編で象徴的に使われるアヘンの缶は、短編の最後で漢江に投げ捨てられるけれど、パクさん自身はまだ、心のどこかにアヘン缶をもっておられるのだ。外見穏やかなけれど、中身は「恨」という劇薬を舐め舐め書いておられるに違いない。

古い社会から見ると、パクさんは新しい問題意識を投げかける作家であり、急激に変わりつつある韓国人の意識から見れば、錘のような存在、それがパク・ワンソさんである。

(新潮第106巻第10号より転載)

どこから見るか＝インド SIA

サイア9回目の訪問はインド。作品を翻訳紹介した作家ヤーダヴさんは、坂になったアンサリ・ロードの一番下のどんづまりの一軒家を、事務所兼住まいにして暮らしていた。

この地域はダリヤガンジと呼ばれ、日本では神田に相当する出版街である。数百軒の出版社が集まっているそうで、確かに路地から路地にひっきりなしに、本や紙類を載せた手押し車が、入って行く。

今回紹介する「仔犬」という短編は、彼の初期の作品で、ご本人によると、「インドの問題」がすべてここに入っているそうだ。そして、カーストやジャーティといった階級差別の問題は、ガンジーが撤廃を試みたところより悪くなっていると言った。

私は、彼が言った「インドの問題」が具体化された場所を訪れた。それは虐待された女性たちや、子供たちの収容施設であり、日本人には理解が難しい代理母の本音に近づく試みであったり、ヒンドゥー教が浸透した社会の中でイスラムの人たちが固有の団結を見せ、それゆえにその小さなコミュニティの中で複雑な様相を見せる女性差別、虐待の問題であったりした。

けれど正直に言えば、インドについて何一つ解ったことは無い。どの立場から見ることによって、インドは全く違う姿、数値データ、心の風景を見せる。それが唯一、確かに手に入れた実感だ。大半のインド人は「インドとはどんな国であるのか」などと、考えてはいない。哲学的な国とは言え、虐待を受けて施設に逃げ込む女性達の8、9割は文字が読めないのだから、哲

学という言葉にも無縁である。私には哲学という言葉が、ごく1部の知識人による「輸出用言語」か、国外から見た「インド発見」に思えた。

宗教にしても同じで、それは思想や生き方や道徳規範ではなく、単に日々の生活そのものでしかなく、その規に従っているという自覚もない気がする。肉を食べないのは宗教心ゆえではなく、それがインドの食生活だからだ。食生活に伝統的な禁忌があるだけのこと。

乱暴に言ってみよう。行動は思考から生まれるのではなく、行動は行動の連続によって続けられていく。なぜなら生活だからだ。このどこに日本人が考えるところの哲学や宗教があるのだろう。

ではあの賑やかで多様な格好をしたヒンドゥーの神々は、なぜ庶民に愛され親しまれているのだろう。彼らにとっての「アナザーワールド」だからだと言えば、またしても乱暴すぎるだろうか。私たちは本を読み物語に遊び、映画を見て現実から離れる。インドではそれを叶えてくれるのがヒンドゥーの神々なのと思った。

(新潮第107巻第4号より転載)